

## 令和元年度第1回浜松市創造都市推進会議 議事録

日 時：令和元年7月5日（金）午後3時00分～午後5時05分

場 所：浜松市役所本館8階 第4委員会室

出席者：伊豆裕一会長、寺田聖子副会長、和久田明弘委員、渡瀬充雄委員、石坂守委員、内藤伸二郎監事

欠席者：杵屋英夫委員、桧森隆一委員、谷川真美監事

事務局：鈴木三男創造都市推進担当課長

東畑俊次副主幹、松本英峰明主任、松島広明主任（以上、創造都市・文化振興課創造都市推進グループ）

### 審議事項1 平成30年度浜松市創造都市推進会議事業報告・決算報告について

（事務局）

（資料1「平成30年度浜松市創造都市推進会議事業報告及び決算報告」に基づき説明）

（監事）

（監査の結果、適正に処理されていたことを報告）

（委員）

広報関係について増えているのはなぜか。

（事務局）

平成28年度に作成した「創造都市・浜松」の取組ピアノ型リーフレットが在庫切れになったので、増刷したためである。

<事業報告・決算報告を承認>

### 審議事項2 アクションプログラム進捗状況、モニタリング指標について

（事務局）

（資料2-1「「創造都市・浜松」推進アクションプログラム コア事業の進捗状況（平成30年度）」、資料2-2「モニタリング指標について」に基づき説明）

（資料2-1の修正 2-6\_2020文化プログラム推進事業の目標数値3,000人→1,500人）

（会長）

本学の取り組みで△がついている事項について説明したい。自由創造工房に3Dプリンターやレーザーカッターなど、本来学生のために導入している機材を市民に開放して利用

していただくことを考えたが、公開講座でレーザーカッターの希望者が少なく、3回の開催で中止となってしまった。

一昨年度は発明協会が大学の大学祭に発表しているのだが、学生が手伝う形で実施したが、PCのソフトが使えないと形にできずに、学生の負担が増えることを先方の団体が気にしたこともある。創造都市推進ということでは、大学の教育プログラムで匠のコースが出来たので、伝統工芸の方面で貢献できると思われる。

### 審議事項3 重点事業の課題に対する勉強会について

(事務局)

(資料3「重点事業の課題に対する勉強会について」に基づき説明)

(会長)

勉強会を行う目的は、創造都市の取組の支援として委員の間で情報共有や議論のなかで、新しいアイデアを出すということである。このなかから選ぶか新たにアイデアを出すかということになると思うが、皆さんの意見はいかがか。

(委員)

重点事業としての勉強会だが、あらたな事業を生み出すきっかけとなるような勉強会にするのであれば、当地域ではない活動を知る方がよいのではないか。

(会長)

昨年度から勉強会というかたちで開催しているが、せっかくの勉強会の成果が表れていないと感じている。私の意見としては、市内や他都市の取組にしても報告だけではなく、その人たちを交えて議論をする場を設けてみてはどうかということである。

また、市内の取組にしても、浜松アーツ&クリエイションが1年間調査をしたと思うのでそこでの意見や、文化振興のあり方検討会での進捗状況などを含めた議論などが考えられると思った。

(委員)

勉強会自体はよいが、誰が勉強したらよいのかという点で、私どもの若手職員で施設管理ばかりに携わって、このようなことを知らない職員もいるので、機会があれば参加させたい。

また、議論ということでは、市役所の若手職員が最も議論が出来ると思うので、文化振興以外の職員も混ぜて議論ができれば、勉強会が役に立つと思った。

(会長)

普段の会議ではそれぞれの役職や立場があるが、お互いが並列の視点で、そして部署の垣根を越えた議論ができればよいと思う。将来の創造都市・浜松を担う人材を含めての勉強会ができればと思った。

(委員)

セミナーで報告だけでは聴講して終わってしまうので、議論やそのような時間を多く設けた方が、参加者の理解がより深まると思う。

(委員)

重点事業の課題認識を持つことが目的にあるため、候補として(1)から(6)が列挙されているが、市役所を含めた関係団体の職員を観点とした勉強会があってもいいのではないか。

(委員)

人と人がつながって、そこからヒントが生まれることがあると思う。

(会長)

私は大学でデザイン思考を教えているので、そのあたりで協力できることもある。事務局と調整して、秋くらいに皆様と各部署の方も参加できるような勉強会を開催できればと思う。

市全体が創造的になるためには、子どもの教育なども重要だと考える。それというのも、私は浜松市のUD審議会の議長も務めているが、浜松市は非常に進んでいると聞いている。それは小学校からUD教育をしっかりやっているからではないか。10年後の浜松をどうするかという議論から始めてもいいのではないかと個人的には思う。

(委員)

事務局案の創業塾の創業者の話などは聴いてみたいと思う。

(会長)

プレゼンしてもらったことを活かして、それを議論のきっかけにすることやプレゼンされた方にも議論に加わってもらうという仕立てでもよいのではないか。先方の都合もあるだろうから、それも含めて詳細は事務局と相談したい。

## 報告事項1 ユネスコ創造都市ネットワーク報告書の評価について

(事務局)

(資料4「ユネスコ創造都市ネットワーク報告書の評価について」に基づき説明)

<質疑応答なし>

## 報告事項 2 平成 31 年度浜松市創造都市推進事業補助金について

(事務局)

(資料 5「平成 31 年度浜松市創造都市推進事業補助金について」に基づき説明)

(委員)

申請件数は昨年度と比較して増えているのか。また、企業の申請書類は完成度が高いと思うが、個人の申請にあたってはブラッシュアップに対する支援などを行っているのか。

(事務局)

前身にあたる、みんなのはままつ創造プロジェクトの昨年度の申請件数が 34 件だったため、全体としては増えている。アーティストの方については、ご自身の作品をつくることには長けているが、申請書類の作成については、得意ではない方もいる。そのような方に対しては、書類の書き方についても浜松アーツ&クリエイションが支援を行っており、採択をされた後も伴走支援を行っていくことになっている。

(会長)

今年度からの補助金事業ということだが、採択にあたって定性的な感想はあるか。

(事務局)

今回は申請件数が多かったこともあって、書類審査の段階で約半数を不採択とせざるを得なかった。そうすると、書類に書かれた内容のみで審査せざるをえないため、申請書類を書き慣れている団体や自分のやり方ことを上手に表現できる団体が、書類審査では優位にあったと思う。

また、こちらが意図していることが伝わりきらなかったこともあった。特に、アーティスト等が行う創造事業支援に関しては、文化振興に対する補助金と思われて、ご自身が開催する演奏会や展覧会に対して補助金を出してほしいという趣旨の申請もあったが、それでは波及効果や創造性の観点で評価が低くなってしまい、事業が社会にもたらす効果が弱い申請が多かったように見受けられた。

(会長)

今後も補助金事業を継続するにあたって、浜松ならではのものを期待する。また、ビジョンを示して、それに沿うような申請については採択していけるようになるとういと思う。

### 報告事項 3 078 の視察について

(事務局)

(資料 6 「078 の視察について」に基づき説明)

(委員)

テーマをどうするかがポイントである。お祭りをやることが目的ではないと思う。ある程度市民の方が来られて新しいものに触れうるということがあれば価値があるのではないかと。実際に浜松で行うときにはテーマを設定すべきであると思った。

(会長)

078 での異分野連携について、具体的な感想はあるか。

(事務局)

078 の関係者と話をしたなかで、「今後どのように異分野間の交流・連携を進めていくのかという点が課題」という話があった。音楽は音楽の団体で、ファッションはファッションの団体で固まってしまうという課題の認識が主催者側にあって、それを解決するためにあえて別分野の団体を混ぜることによって、「風穴を開ける」ということが、今回の副題にもなっている。

(会長)

小さなイベントを別々に開催していたが、それを同時に開催することでシナジー効果を期待しているが、まだまだ課題があるということが窺えた。

### 報告事項 4 SXS2019 の視察について

(事務局)

(資料 7 「SXS2019 の視察について」に基づき説明)

(会長)

オースティン市の人口が 9 万人と浜松市に比べて人口が少ないが、事業にかける金額や予算が違うのかと思った。浜松市が文化にかける予算規模は、人口ひとりあたりどのようになっているのか。

(事務局)

以前にユネスコに提出した資料に数値があったが、今は手元に資料がない。

(会長)

このイベントの参加者はどこから集まるのか？地元の人というよりは全米から人が集まるということなのか。

(事務局)

その通りである。

(会長)

カオスマネジメントという言葉は一般的な言葉なのか。

(事務局)

一般的ではない。カオスイベントということが想定していないことを目指しているようで、化学反応を期待して創造の芽が出てくることを期待している。

(会長)

私もよくデザインを教えるにあたって、創発が重要だという話はするが、そこから創造性を導くという点は納得いくものであった。

(委員)

資料7の最後に、SXSWS×浜松ということで、「響きの創造への挑戦」ということがあったが、これは今後やっていきたいということか。

(事務局)

2020の文化プログラムを検討しているが、創造都市推進会議の仕組みも含めて協働する仕組み、響き合う仕組みについては常に考えていかなければならないと考えている。その仕組みも含めて、今後どのようにしていくべきか、ということを強く感じた。

(委員)

事務局の報告を聴いて注目した部分は行政主導ではないという点である。どのような運営の仕組みなのか。

(事務局)

運営はSXSWS社が行っており、100%の民間資本である。入場料やスポンサー料で運営費を賄っている。オースティン市役所は規制緩和のみだと思われる。